

國學院大學学術情報リポジトリ

〔紹介〕 小林覚著『古代出雲の実相と文学の周辺』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 雅博, Taniguchi, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000351

〔紹介〕

小林覚著 『古代出雲の実相と文学の周辺』

谷口雅博

本書の著者である小林覚氏は平成二十六年六月に六十三歳で逝去されたと伺っている。直接お目にかかったことはなかったが、本書にも収録されている『出雲国風土記』関連の論考を通してお名前は存じ上げていた。あとがきによれば、本書は小林氏が生前に歌誌『白鳥』や研究史『出雲古代史研究』、また『古典評論』等に発表された論考を、氏が所属していた出雲古代史研究会の内田律雄氏や関和彦氏が一冊の書物としてまとめたものであるという（あとがきは著書の妻、小林和代氏が書かれて

いる）。その内容は以下のようになっている。

序章 古代文学への初発（二節）／第Ⅰ部 『出雲国風土記』を読む 第一章 『出雲国風土記』散抄（二〇節） 第二章 自然神とともに（九節）／第Ⅱ部 折口信夫の世界（八節）／第Ⅲ部 古代文学の発生と成立（八節）／終章 幻の出雲行き

第Ⅱ部と第Ⅲ部は、文芸評論といった内容となっている。尤も、そのような枠にはめてしまうのは著者にとっては不本意か

も知れない。第Ⅲ部については、吉本隆明、古橋信孝、藤井貞和などの文学發生論に関わって話が展開する。私自身読んだことのあるものが並ぶが、正直なところ自分では良く理解出来ないことの多かった内容が非常にわかりやすく説かれていてありがたい。ソーシャルについて記されたところをみても、私などの素人には理解出来ないような理論についても極めてわかりやすく書かれている。難しい事柄を難しのままに伝えることは実はそれほど難しいことではなく、難解な理論を分かりやすく説明するほうが余程難しい。長らく高校で教えられてきた著者ならではの理解力・伝達力なのではなからうか。第Ⅱ部は折口信夫に関する論考である。古代文学の研究に携わる身としては、文学發生論等に関する一連の折口論には接することが多いものの、歌人であり作家としての折口については、全く熱心な読者ではなかったゆえに、興味深く読ませていただいた。いや、例えば枕詞「あられふる」に関する折口説の変遷について書かれた部分を讀んだ時には、古代研究の面においても実は熱心な読者ではなかったことを痛感させられた。その内容が書かれている節のタイトルが「折口信夫は読まれているのか」であるのだから、まさに痛いところを突かれた感じである。あとがきに紹介されている著者の口癖、「勉強しない奴はだめだ」が身に

染みる。

第Ⅰ部『出雲国風土記』を読む」と題された各章の内容は、研究ノートと言えば良いだろうか。しかしそうした定義づけもやはりあまり意味はないのかも知れない。『出雲国風土記』に記載された記事を分析するその内容は研究論文にそのまま発展し得る内容となっている。何より文献としての『出雲国風土記』を緻密に読んでいる痕跡が窺える。例えば、秋鹿郡大野郷の地名起源説話に、

和加布都努志能命、御狩し坐しし時、この郷の西の山に狩人を立て賜ひて、猪羆を追ひて北の方に上りたまふに、阿内の谷に至りてその猪の跡失せき。

とあり、それまでの多くのテキストが、神が猪を捕らえるのに「狩人」を立てたという文として理解されてきたところであったが、細川家本・倉野本などでは「持人」となっているところからの想定で、元の姿を「待人」とする可能性を提示された（『秋鹿郡大野郷の「狩人」』）。この論は一九九四年六月刊行の『風土記研究』十八号に掲載されたものであるが、『風土記研究』を創刊され、当時も編集責任者であった植垣節也氏は、

一九九七年十月に自身が校注をされた小学館の新編日本古典文学全集『風土記』の該当箇所を「待人」とし、その頭注に「字形の近似、仕事の内容から小林覚説に従い「待人」と訂する。狩の獲物を待ち受けて網へ追い込む人。」と説明している。その後、一九九九年に刊行された講談社学術文庫の『出雲国風土記全訳注』（萩原千鶴著、二〇一五年に刊行された角川ソフィア文庫の『風土記』上巻（『出雲国風土記』担当は橋本雅之氏）においても「待人」説が採られ、それぞれに小林覚氏の説に従うと注する。ほぼ通説化したと言っても良い状況であり、本文校訂史の上ではとても大事な研究成果であると言える。

その他にも、意宇郡比売埼説話の「比売埼」という文字の不確かさの指摘や（「比売埼伝承のこと」）、仁多郡三澤郷が古写本では「三津」とも訓めること（「大國主命の子孫」など、現行テキストの抱える問題点を指摘している。「三津」郷の説話については、内容との関わりで次のような仮説も提示している。

「みつ（御津）」の異文が生じたのは（それが異文だとして、「夢をみましたか」という問い掛けにたいして、「見つ（みました）」と答えるのが、至極まっとうな会話のやりとりになるからだと思われるのだ。「三沢」と答えたのでは、

対話になっていないと言えるだろう。

口の聞けない御子であったアヂスキタカヒコという神が初めて父神に対して発言をした場面の説明であるが、この話ではアヂスキタカヒコの発言の後に父神が「何処を然云ふ（どこをどのように言うのか）」と尋ねており、「御澤」若しくは「御津」は、その後の展開と合わせて神聖な水の湧き出る場所を神託によって示した言葉として理解されてきた。ただそうした従来説では、この発話の唐突さが今ひとつ理解し難かっただけに、「御津」という場所の提示に加えて、「見つ」の意も込められているとするならば、本文の確定にも寄与する可能性を持ち、加えて新たな説話解釈の可能性も提示するものであって、非常に興味深い。

また、島根郡加賀神埼条に見える麻須羅神（佐太大神の父神とされる）の名義については、大丈夫（ますらを）からの連想で「雄々しい」神と説かれることが多いが、著者は、「洞窟の暗闇の中に、正体不明で見えないけれども確かに居るはずの神」Ⅱ「坐す＋ら（接尾語）」神ではないかと説いたり（「加賀神埼伝承をめぐって」）、「佐太大神たる龍蛇の容れ物の名前」としての「升＋ら」神ではないか（「黄金の箱の中の龍蛇」）と説い

たりするなど、従来説では判然としていない問題について、自由で柔軟な発想を用いながらも、用例を踏まえた上で、新しい解釈を随所に提示している。

著者は頻繁に出雲の地を訪れ、その世界に触れながら、しかし必要以上に現地の風景に感化されることなく、冷静に、客観的に『出雲国風土記』という文献に記された文章を分析しているように思える。また、恐らくは論じたいことがまだまだ無限にあった筈なのだが、「ここでは深入りしない」「ここで、この問題に立ち入ることはできない」「残念ながらここでもこの問題には立ち入らず」といった表現が多数見受けられる。読み手としては、そこを説いて欲しかったという思いが強い。例えば次のような指摘は、風土記編纂の問題に大きく関わるものであり、私自身以前からこだわっていた問題とも関わっている。それは、風土記撰進の命令とされる『続日本紀』和銅六年の記事によると、郡・郷の名については「好字を着けよ」というのみに留まり、山川原野の名については、その由来を記せとあるにも関わらず、「現『出雲国風土記』については、山川原野の名前についての由来は無く、あるのは、郷・里の名前の由来だけである（中略）つまりは、『続日本紀』記載の「官名」に従ってはいないということになる」と述べ、そうして、「それがど

のような事を意味するかは、ここでは続けない」と言う（『出雲国風土記』の地名「起源」伝承）。本当は続けたい内容が頭の中にはたくさんあったであろうことを推測させる。恐らく、直接お話を伺う機会があったならば、様々に興味深いお話が伺えたのではなかろうか。それは既に叶えられないということが何よりも残念であるが、しかしせめてこの一冊を残して下さった点に、著者と、編集を担当なさった方々に感謝申し上げたい。この一冊は、書名の示す意図とは異なってしまうかも知れないが、まさに「文学」の書であり、「文学研究」の書であると思は思う。研究史の中に位置づけるべき価値を持っている本である。

（A5判、四二二頁、今井出版、二〇一六年七月発行、定価二五〇〇円＋税）